

教団の教えは去勢！ 女だけの金責めカルトの里に 入り込んだ男！



玉子王子 著

1 章 金責めカルトの里に脚を踏み入れてしまった男。キ〇タマの運命は……

うさぎ県の都市部から離れた山里。

主要道路を離れ、小さな集落に入る。

と、土道の上を何かが横切る。

猫だ。

よけられない。

よけたら溝に突っ込むしかないタイミングだった。

しかし運転手、石田はハンドルを切る。

ドン、と音を立てて道が車の腹を擦る。

「うわ……」

猫が走っていく。

石田が普通の運転をしていたら、可哀想だが事故るわけにもいかず、轢いてしまっていただろう。

だがそんな事などお構いなく、むしろひき殺されかけた事に怒気すら見せて猫は去っていく。

「ったく……急に飛び出しといて」

舌打ちしつつ、途方にくれる。

携帯を見るが、通じない。

仕方ないので、歩くしかない。

一様、道は広いので他の車が通れなくはない。

迷惑は迷惑だが、どうしようもない。

宿泊予定の宿まで歩くしかなかった。

民宿らしい建物。

車のことを言うと、宿の女将さんが村の人に頼んで何とか車を引っ張ってきてくれるという。

鍵を預け、部屋に入る石田。

石田はジャーナリストだった。

フリーである。

不安定な立場なので、危ない取材もこなす。

少し前にやったのは、巨乳巫女の島で行われる奇祭にもぐりこむという潜入調査だった。

見事に失敗した。

股間を無意識に押さえる。

その時の体験はいまだに夢に見る。

寄ってたかって巫女さんに追い回され、肉玉を蹴り上げられ、終いにはフェラでいったら肉玉を握り潰すというギャンブルをさせられた。

見事に出してしまい、握り潰された。

今はナノテクで玉ぐらい一日で治るとはいえ、痛みや恐怖、屈辱は何も変わらない。

もう一度潜入しようなどという気はまったく起こらず、調査は終了。

当然そんな半端な記録はどこの記者にも買い取ってもらえなかった。

仕方ないので『男子禁制奇祭に潜入して捕まった短小包茎男。巨乳巫女さんのお仕置きは神罰の玉潰し』という**屈辱的なタイトル**でネット上に置いたが、今の所三十人ぐらいしか見てくれている。

——見てない人はぜひ見て欲しいぜ、俺の**魂の記録**を。

結局奇祭自体は見ることも出来なかった石田だが、結末が自らの男性器破壊という悲惨なものだったのでその取材への思い入れは強かった。

今だ、夢に見る。

海野という巨乳巫女の超絶フェラテクニックでいかされ、瞬間肉玉を粉碎された天国と地獄を同時に味わったあの日を。

悲惨でもあったが、実の所その日のことを思い出して自分で一物を握ることも一度や二度ではなかった。

もし彼女と普通に出来たら、と思わない日はない。

恋しているとさえいえるが、行きがかり所もう一度島に行くなどありえないだろう。

その奇祭島のケースに比べ、今回のケースは安全だと考えている。

過疎の村に、妙なカルトが広がりつつあるという話だ。

まあ良くある気もする話。

ただ、そのカルトの内容が問題だった。

この多摩梨村という、男なら住みたいと思わない村に本拠地がある新興宗教団体『悪玉浄化の会』の教義は、噂で聞いても中々信じられない内容だった。

それに、噂だけで記事を書いても誰も買い取ってくれない。

石田はフリーなので、買ってもらえなければ趣味で雑文を書いているのと同じだ。

というわけで今日、取材を申し込んでやってきた。

宿から電話をかけると、信者の女が迎えにやってくる。

着物のような、少しアレンジされているような妙な服。

胸元が大きく開いているのが目を引く。

「それでは、教主の下へご案内します」

小さな団体だからか、話はスムーズだった。

教団の本部は、公民館だったような建物で威厳も何もない。

いずれ教団が拡大すれば神殿でも建てるのかも知れない。

二階の奥の部屋で教主と面会する。

一様ソファーなど並べられ、ある程度豪華な雰囲気の部屋だった。

石田もソファーに座らされ、その前に女性が歩いてきて座る。

一緒に歩いてきた二人の女性は、左右に立ったままだ。

側近という感じの、教主より少し若そうな二人。

一般の信者と違って、普通の服装だ。

座った女は、目に見えて美しい。

年齢も二十代の半ばに行っていないのではないか。

「私がこの悪玉浄化の会の教主、多摩貫静香と申します」

男としては、少し不安になる苗字の女性だった。

かなりの巨乳で、信者たちと同じように胸元の開いた着物らしき服を着ている。

ゆっくり近付いてくるだけでもユサユサと揺れ、目を引かずにはいられない。

自己紹介もそこそこに、質問を開始する。

「それではお聞きしますが……ずばり、悪玉浄化の会の、悪玉とはなんのでしょうか？」

普通に考えれば悪人、悪党側というような意味だろう。

だが、教団のホームページによるとまったく違う。

「うふ、女性の口からそういうこと聞きたいなんて……やはり悪玉をお持ちの方は違いますね」



机の下で膝が締まる。

「悪玉とは、もちろん男性が股間にぶら下げていらっしゃる、睾丸のことですよ」

唾を飲まずにはいられなかった。

「えーっと、つまり」

「うふふ、要するに、悪玉浄化とは……」

「ええ、はうっ」

グニ、と股間を押される。

上体をほとんど動かさず、教主が足を伸ばしてきていた。

いつの間にか靴も脱ぎ、細い足の指先がグニグニと石田のジャージを押し、その下のわかりにくいはずの肉玉を的確に転がす。

よほど、そういう動きに慣れているのか。

——こ、この女足コキ凄そう……

だが、お願いしようとは思わない。

残念ながら、足コキというのはある程度大きい男にしか許されない楽しみだろうと石田は思う。

石田の一物は、相当に小さいのだ。

問題なく性交可能な範囲では最小クラスだろう。

足コキと言う多少一般的ではないプレイを味わうにはサイズが足りない。

まあ、踏むような形なら可能だが、それを喜ぶM体質はない。

ないつもりだ。

だが、巨乳巫女のフェラ去勢で自慰するようでは、Mではないという思いも怪しいものではある。

グリグリグリ、と肉玉を女の指が押す。着物なので、ストッキングなどはつけていないようだ。

「うふふ、悪玉、どうかされました？」

「い、いや……」

ちら、と教主の左右の信者を見る。

一人が、頬を緩める。

もう一人は無表情だが、スッと自分の股間を撫でて見せる。

——こいつら、わかってる。教主が俺のキ○タマ足で弄ってること……。

判断に迷う状況だ。

二人きりでも、誘っているというにはよく分からない行動。

まして、信者二人と同室では。

グニグニ、休みなく肉玉を押していた指が下がる。



「あっ」

「うふふ、肉玉浄化とは……いうまでもなく去勢のことです」

「そ、それは……」

「去勢。睾丸潰し。キ○タマ抜き。玉潰し。金潰し。うふふ、要は悪玉から、男性を解放するということです」

「そ、そんなこと……」

「今は、ナノテクでキ○タマは治りますからね、問題ない教義と思っております」

ありすぎるだろうが、と思う石田。

「一週間に一度悪玉浄化を行えば、その影響からかなり脱することが出来ると考えております」

「そ、それで信者が集まるんですか？」

「うふふ、それは秘密。あ、石田さん、入信されませんか？」

「真っ平です」

「おほほ」

笑う教主。

左右の女のうち、先ほど頬を緩めていた女が眉を顰めていた。

——やべえ、怒らせたか？

真っ平、は言い過ぎかもしれない。

だが、真っ平なのだ。

「その、教義がなぜそういう形なのか」

「諸悪の根源が悪玉だからですよ。性欲、破壊衝動、それらはすべて悪玉から発するものでしょう？」

そういえばそうかもしれないが、だから「浄化」だというのは無茶だろう。

所詮、自分が女だからの発想。

いや、女だろうが、相当変な話だ。

もしかしたら教主も、左右の女のような信者も男と何かあった者たちなのかもしれない。

噂に名高い兎岳の刑務所の看守たちのような。

「失礼ですが、教主、過去に男性と何か」

「……あら、何かとは？」

少し眉を顰める教主。

あまり追い込むと取材を打ち切れかねないので、話題を変える。

「いや、別にそんな大した意味は。次の質問ですが……」

女だからそう教義が出てくるのだろうと聞きたいが、中々難しい。

「その、男の俺からしたらかなり無茶な教義ですけど。やっぱり女性だからこそ、思いつかれたのかなあって」

「あら、私が男なら、この教義に辿りついていない……自分のキ〇タマ惜しさに思いついても口にしない？」

「いや、そういうわけじゃ……」

何か、誤解された気がする。

しかし完全な誤解でもない。

どういふべきか。

と、慌てた様子の着物の女が走りこんでくる。

教主に何事か耳打ちする。

「申し訳ありません、少し外します」

「はあ、どうぞ」

待合室でしばらく待って欲しいといわれ、一時間ほど待つ。

だが、結局無表情な信者がやってきて、教主に用が出来てしまったので今日の取材は終わりにしてほしい、といわれてしまう。

粘る意味もないので、公民館を出る。

いや、一様本部であるが。

「何が起きるってんだよな」

首をかしげつつ、歩いて民宿に帰る。

集落は農村だが、一様公民館の周りにはいくつかの商店や民家が建っている。

その外周部に、外からの客を迎え入れる民宿があるわけだ。

「ちょっとすいません」

若い女に声を掛けられる。

胸元の開いた着物。

やはり、信者なのだろう。

「教主様を取材された、ジャーナリストの方ですよ？」

「ええ、ジャーナリストです」

フリーのそれは、ほとんど無職に近い気もする。

だからこそ、他人に認められるのは嬉しかった。

と、同じような女が二人ほどいる。

「教主様に失礼な質問をされた」

「え？」

ゾクリと、嫌な予感がする。

普通なら、文句を言われるぐらいだ。

だが相手は、カルト教団の信者だ。

しかもその団体の教義と来たら、「肉玉は諸悪の根源だから週一で潰すべし」である。

そんな連中に教主を侮辱したなどと思われたらどうなるか。

クイ、と正面の女が両手を掴む。

もちろん女の力だ、振り払える。

「ちょ、はな……」

「浄化よ！」

グチ、と女の膝が石田の股の膨らみを押しつぶす。

「おぐっ！ な、なにをする……」

急所攻撃を警戒していた。

だからすでに締めていた股を、膝蹴りに合わせてさらに締めて引くことは出来た。

それでも、とっさのことで下がりきれない。

ほかの部分なら大したことはない衝撃だが、股間では大打撃だ。

意識が一瞬薄れるほど。それでも、ほぼ防御した。

急所にモロに食らった痛みに比べれば大したことはない。

肉玉が急速に縮み上がるが、まだ動ける。

と、その腕を別の女が掴む。

「押さえるのよ！ キ〇タマ潰して浄化するんだから！」

「おいマジか！」

「後ろから押しだして！ キ〇タマ狙うのよ！」

「よせっ！」

信じ難かった。

なにをしたというのか。

教主にちょっと嫌な質問をただけだ。

というか、彼女らはそれを伝えられ、復讐に来たのか。

教主よりムツとした感じだった側近らしい信者が、血の気の多い若者に声をかけただけか。

考えている余裕はなかった。

「放せえっ！ はぐっ！」

ゴチャ、後ろから押し出される石田。

股を締めた状態ではあるが、深く股間に女の膝が減り込む。

グリグリグリ、是が非でも去勢するとばかりに若い女の膝が石田の股間で暴れまわる。

グリグリグリ、是が非でも去勢するとばかり
に若い女の膝が石田の股間で暴れまわる。

「はぐうう」

「腕の力なくなってきたよ！ **キ〇タマもっと潰して！**

「わかってる！ いっつも練習してるでしょ、

キ〇タマ潰しの！」

「グチャッと！ もっとグチャッと！

一気に去勢するのよ！」

「キ〇タマ潰れた時の男の顔、最高よね！」

「玉ぐらい治るのに、この世の終わりって顔で！

だから金潰しって好き！」

「や、やめ.....」

全身の力が抜けてくる。

「はぐうう」

「腕の力なくなってきたよ！ キ〇タマもっと潰して！」

「わかってる！ いっつも練習してるでしょ、キ〇タマ潰しの！」

「グチャッと！ もっとグチャッと！ 一気に去勢するのよ！」

「キ○タマ潰れた時の男の顔、最高よね！」

「玉ぐらい治るのに、この世の終わりって顔で！ だから金潰しって好き！」

「や、やめ……」

全身の力が抜けてくる。

ボス、ともう一度膝蹴り。

先ほどまでは前から押しつぶす形だったが、脚が弛んだので太股の間をすり上がって押し上げる形だった。

まだ、スパンといい音を立てて決まるほどではない。

だが足を締めて防御は不可能になりつつあった。

肉玉を押し上げられ、腰骨との間で押し潰されて白目を剥きかける石田。

「き、キ○タマああああああ……」

「あはは、タマタマ痛い？」

「悪玉浄化のためよ、我慢しなさい、キ○タマ潰しぐらい」

「潰れたキ○タマ握り締めて教主様にお詫びするのよ！」

「こ、これは教主が？」

「馬鹿ね、こんな細かいこと指示するわけないでしょ」

「多摩鳥さんがあなたが無礼だったって言ったからキ○タマ潰しに来たの！」

——なんで一々男の一部分を縮ませる苗字なんだよ……

それはもちろん、教主がまずふさわしい名を名乗り、側近にそれに似た名を与えたからである。こんな偶然はない。

普通の側近が多摩鳥、無表情な方が多摩割である。

が、もちろん石田はそんなことに関心はない。

「はぐうううう！」

「あ、こいつ泣いてるんじゃない？！」



「女の子にキ○タマ蹴られて、おじさんが泣いちゃうんだ！」

「それでもおチンチ○ぶら下げてるの？」

「キ○タマってそんなに痛いよね！」

「チンチ○縮んでるでしょ？ 見てやろうよ！」

「そ、それだけは……」

元からかなりの短小包茎である。

蹴り上げられ、恐怖の中にあればさらにそうだ。

が、容赦がない若い女信者たち。

一人が羽交い絞めにし、二人がズボンを下ろす。

腰を捻って抵抗する石田。

「動くんじゃねえよ！ 動いたらキ○タマ潰すぞ！」

「おぐっ！」

しかし、股間を容赦なく拳で殴られ、下手な動きは出来なくなる。

動いたら潰すぞ、というか、どう考えてもさっきから潰す気と思えるが、それでも動けなくなる。

それほど、男にとって股間の肉玉への攻撃は恐怖で、それを止めてもらえるなら先のことは何も考えられなくなるのだった。

「ズボン下ろした、あとはパンツ一枚！」

男の尊厳を守る最後の砦を掴む若い女。

「パンツだけは……」

震えながら訴える石田。

その声は、ただむなしく響くだけだった。

体験版終わり

この後更なる金責めや爆乳熟女姉妹どんぶり、
マシンガン短小責めなどが石田を待ち受けています。

続きは製品版で